



紅赤とベニアズマ

元九州農業試験場作物開発部長 坂本 敏

前号でお知らせしましたが、坂本 敏様は国際協力事業団派遣専門家としてインドネシア・ボゴールでの植物遺伝資源技術協力事業でご活躍のところ、平成11年1月現地で急逝されました。坂本様は長くサツマイモ育種に携われ、ベニアズマをはじめ多くの優良品種育成を手がけられた大功労者であり、突然のご逝去はわが国・インドネシアばかりでなく、全世界サツマイモ事業の今後の発展にとっても大きな傷手であります。第59号掲載の「インドネシア・サツマイモ物語(1)」につづき、現地のサツマイモ事情について「同(2)」以下のご寄稿をいただくことになっておりましたが、ここには以前「サツマイモの女王紅赤の100年」に寄稿された標記を、紅赤百年記念誌編集委員会のご承諾をいただいで掲載し、坂本様の業績の一端をしるぶことといたします。

(編集部)

❀ 色に迷う

色と言っても色恋の話ではありません。サツマイモの皮色のことです。九州ではコガネセンガンという、味のよい高澱粉の白蒔が昭和41(1966)年に育成され澱粉原料のほか、広く食用にも用いられ、昔から食用と澱粉原料の両方に用いられて来た農林2号とともに、おいしい白蒔というイメージを育てて来ていた。さらに、さかのぼれば明治33(1900)年に広島県の久保田勇次郎氏によって、アメリカから持ち帰られた七福(別名アメリカ蒔)が味のよい白蒔として西日本に広く栽培され、食用のサツマイモは白蒔でも差し支えないと考えられていた。

これに対して関東では、青木昆陽以来食用は赤蒔という意識が一般的であったし、さらに紅赤が普及したためこの感は一層強くなっ

た。また戦中、戦後の食料不足の時代に主食代用として配給されたサツマイモが、味の悪い水蒔の白蒔であったことも白蒔のイメージを悪くさせた。

この結果、食用のサツマイモの好ましい皮色は紅赤のような鮮紅色と考えられてきたし、昭和50(1975)年に育成されたベニコマチも鮮紅色の皮色で選抜された味のよい品種であった。これに対し、ベニアズマは濃赤紫色の皮色で蒸しいもにしたときは、どす黒くなって少し濃すぎるのではないかと心配した。しかし、早掘りすると一般に色が薄くなるし、貯蔵中にも若干褪色することが判ったので、濃いめの皮色で丁度よかったと思われる。色をはじめとする外観というものは、第一印象に影響するだけに難しいものだと思感させられた。

❀ 名に迷う

名といえば、当然品種名のことです。ベニアズマの命名についても色々頭を悩まされた。農林番号が品種名であった頃は別として、育種家として頭を使うのは品種名の命名のときである。ベニアズマの育成された昭和59(1984)年頃は全国のサツマイモの生産量の約45%が食用に消費されており、東日本では生産量の約80%、西日本では約35%を占めていた。ベニアズマは当時、千葉県四街道市にあった農業研究センターの甘しょ育種研究室で育成され、直ちに千葉、茨城、鹿児島の実験地で奨励品種に採用されたが、当然普及の対象地域は関東が大半を占めると考えていた。

そのため、品種名候補として関東一円を対象とした名称を考えた。育成地では、研究室全員から候補名を募集して提出することにしており、多くの候補名のなかから相談の結果、幾つかの品種名候補を絞って提出した。勿論、ベニアズマも最有力候補として、この中に含まれていた。

その後、ベニアズマは関東の食用サツマイモの主要な栽培地の茨城、千葉、埼玉、栃木の各県は勿論のこと、東海の愛知県、滋賀県、中国の広島県、島根県、九州の鹿児島、宮崎、熊本、大分、福岡の各県でも奨励品種に採用された。栽培面積も、品種採用の翌年の昭和60年に早くも1,436haに栽培され、その後急速に拡大し、平成元年には1万haに達し、同5年には高系14号をオーバーして全国の24% (12,769ha) に栽培され、我が国のサツマイモの栽培面積で第1位の作付率を占めるに至った。

当初、関東を主たる対象地域と考えて命名した品種名が必ずしも適切でなかったこととなり、いささか考えさせられた。紅赤のようにもの特性だけを品種名に付けておけば、このような問題は起こらないで済んだかもしれない。

❧ 皮色の突然変異

紅赤は八房の芽条突然変異と思われるが、サツマイモは皮色の突然変異が起こりやすい作物である。紅赤は自然に発生した突然変異であるが、人工的に突然変異を起こさせる場合もある。私の勤務した九州農試の甘しょ育種研究室では、茨城県大宮町の放射線育種場に依頼して、サツマイモの皮色変異を人工的に作成したことがある。この結果、白蒔から赤蒔、赤蒔から白蒔への人工的な変異が、比

較的簡単に起こることが判った。実際、ベニアズマの皮色の芽条変異が栽培中に発見され、白蒔の良食味品種として農家に栽培されていると聞いている。ただし、紅赤のような自然突然変異は、比較的バランスのとれた変異であることが多いのに対し、人工の突然変異は、その他の性質にも変異が起こっていることが多く、皮色の変異固体が低収や低澱粉の変異も伴っている場合もあり、食味の変わっている場合さえある。自然界にはバランスを取るという作用が有るのかも知れない。

❧ 蔓ぼけにくい新品種

紅赤は栽培しにくい品種といわれているが、その理由の一つは蔓ぼけすることである。そのため、紅赤を上手に栽培するには、1. 植え付け間隔を広くする。2. 肥料を控えめにする。3. うねを大きくする。これに対し、ベニアズマは耐肥性を持ち、ある程度施肥量を増やしたほうが多収になる。このように新品種が耐肥性を持っているのは、交配の親に耐肥性の品種を用いることと、選抜の過程で施肥条件下で多収を示す系統を選りすぐるためである。これまで、野菜跡のように肥料の残った畑では、蔓ぼけするため栽培できなかったサツマイモが、耐肥性を持つ新品種が育成されたため、栽培できるようになった。

❧ これからのサツマイモの消費拡大の進め方

紅赤もベニアズマも食用の良食味品種であり、澱粉用の消費が減少したあと高系14号、ベニコマチとともに、食用の主要品種として栽培が続けられている。しかし、国民一人当たりの食用の年間消費量は最近約25年間ほぼ横ばいで、大きな変化はない。今後、澱粉用の減少が一層進むと思われる、今までに減少し

た約20万tの澱粉用消費のうえに、さらに今後減少が予想される澱粉用の数量をカバーする用途が開発されない限り、サツマイモの作付け面積の減少に歯止めが掛からないことになる。新用途の開発というのは、簡単なようで非常に難しい。品種、栽培、加工、流通などの、関連する人々の協力がなければ成功しない。

☞ サツマイモの低コスト化

サツマイモの価格、殊に市場販売用の諸の価格は極めて高い。この価格は生産地からの距離、品質、需給のバランスなどが影響していると思われるが、せめてジャガイモ並の価格なら、もっと需要が伸びるのではないだろうか。そこでサツマイモの低価格化の方策について考えてみよう。

1) 流通のマージンを低減できないか。せめて小売価格が生産者価格の2倍になればもっと買いやすいのではなかろうか。そのために

は、産地直売とか、包装の簡素化等で中間経費低減の方法を検討する必要があるのではなかろうか。

2) 生産者価格を低減できないか。澱粉用サツマイモの生産費は1kg当たり約40円という調査結果があり、澱粉用の買入れ基準価格は1kg25円強、奨励金を含めた価格は32円弱である。勿論、食用の場合は製品歩留も低いし、選果、洗浄、仕分け、包装などにかかなりの経費を要する。しかし、何とか各工程の低コスト化による価格の低減を考える必要があると思われる。

本論から若干それたが、紅赤もベニアズマも優秀な食用品種である点では共通している。今後の我が国のサツマイモの隆盛のために、両品種に益々頑張ってもらいたいし、両品種の欠陥をカバーする新品種の登場を期待したい。(平成9年10月)

参考 甘しょ主要品種の都道府県別作付面積(抜すい、平成8年産)

単位: ha

	農林1号	タマユタカ	コガネソノガン	ベニコマチ	ベニアズマ	シロユタカ	シロサツマ	高系14号	紅	赤	甘しょ計
茨城		1,270	250		4,600			1,120	190		7,650
埼玉				16	502			32	38		605
千葉		35	343	176	4,939		6	430	415		6,410
神奈川				30	350			99	30		527
静岡					138			1,046			1,480
愛知	86		7		189			295	287		929
徳島								1,270			1,270
愛媛	75							285	70		617
高知					11			621			632
長崎	282							290			1,140
熊本	79				99			463	32		834
宮崎			737		85			1,766			2,730
鹿児島			6,516			3,750	2,241	864			14,600
都道府県計	736	1,305	7,863	456	12,852	3,750	2,247	11,333	1,797		46,042

注: 甘しょ作付面積が500ha以上の県を抜すい(いも類の生産流通に関する資料・農林水産省農産園芸局畑作振興課)